

東京女子医大事件

瀬尾医師「回転数上げる」

人工心肺 佐藤医師と疎通欠く

「人工心肺の回転数を上げる」。平柳明香さん(当時12)を手術した東京女子医科大病院の手術室で、チーム責任者の医師は指示した。人工心肺担当の医師がこれに応じる。ポンプの回転数は通常の3倍近くになっていた。お互い意思疎通のない中で手術は進行し、結果的に明香さんは亡くな

った。医師の供述や関係者の証言で、手術経過をたどった。

昨年3月2日午前9時、6人の医師が手術室に入った。

心臓手術では心臓と肺への血流を止めなければならぬ。このため人工心肺を体外に取り付け、臓器に供給された静脈血を吸引し、酸素を加

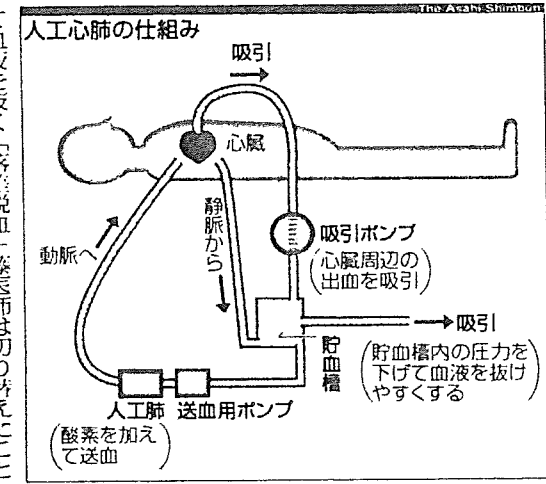
えて動脈に送る仕組みだ。人工心肺は午前11時50分に開始された。

「脱血(じんだ血液を吸引すること)をどうにかしろ」

手術の責任者瀬尾和宏容疑者(46)証拠隠滅容疑で逮捕IIが言った。瀬尾医師は手術中、手元が見えなくなることを極度にいやがる。このとき

も、心臓周辺にじみ出た血で手術部位が見えにくくなっていた。人工心肺には、このにじみ出た血液をポンプで吸引する役割もある。

人工心肺担当の医師佐藤一樹容疑者(38)業務上過失致死容疑で逮捕IIは、この時点で心臓と血液をためる容器(貯血槽)との高低差を利用し「吸引にします」。左



て血液を抜く「落差脱血法」から、貯血槽の圧力を下げて血液を抜きやすくする「陰圧吸引補助脱血法」に切り替えた。だが瀬尾医師は「意味が

わからなかった」。瀬尾医師の指示で80回転に上げた。「もっと」。佐藤医師は「ファイヤー(怒る)しやすい瀬尾医師」の指示に従った。100回転に上げた。

陰圧法の場合、回転数を上げると貯血槽内の圧力が高まってしまふ。通常の3倍近い回転数が続き、血液を吸引できなくなる脱血不良が起きた。

明香さんの顔が腫れ鼻から出血する。だが医師のたれも、事態を改善できなかった。

「だれも回避措置を知らずに手術をしていた。考えられないことが現実になってしまった」。亡くなった5日、瀬尾医師らによる、記録の改ざんが始まった。

女子医大小児心臓手術事故

瀬尾/佐藤医師

2002年6月30日 朝日新聞